

国際医療福祉大学医学部 第1期生の歩み



2017（平成29）年4月2日に医学部の開設式典を行ない、留学生20人を含む140人の1期生は革新的な医学教育のもと、医学・医療への道を歩み始めています。その歩みをご紹介します。

<アクティブラーニング>

本学医学部で行われている授業の大きな特長は「アクティブラーニング」です。

知識を一方向的に伝達することを目的とした大講義室での講義では身につかないことも多くあります。本学は教員と学生、そして学生間のディスカッションを通し、知的に成長する場を創り、学生が主体的に課題を発見し問題の解決策を見いだしていく能動的学習、アクティブラーニングの実践をめざしています。

アクティブラーニングの形態にはさまざまなものがあります。例えば、反転授業はその一つです。学習教材を用いた事前学習を前提として、講義の初めに予習確認の小テストを実施します。その後、講義形式のミニレクチャーを実施した上で、小グループに分かれて、ディスカッションを行う、という形態を取り入れ、知識を効率的に定着させるとともに問題解決能力を養うことをめざしています。

入学当初、学生の大半がアクティブラーニング未経験者でした。グループディスカッションに慣れてもらうために、入学後のオリエンテーション初日から、さまざまなテーマで、グループディスカッションをしなくてはならない環境をつくりました。

昼食時には7人グループで食事をしながら、全員に共通する話題を見つけ、昼食後、全員の前でグループ発表をしてもらいました。その後、「一生のうちにやってみたいこと」（アメリカでは「ライフ・バケットリスト」と呼んでいます）「医学部でやりたいこと」「医学部で学ぶべきこと」などのテーマを模造紙、付箋を使い、KJ法を活用して話し合ってもらいました。

続いて、実際の本学のカリキュラムや21世紀の医師に必要な能力、といった内容を教員が紹介しました。多くの大学のスタイルである「1年生のカリキュラムはこうです」と提示するのとは異なるものです。これは、学生には、自らが自らの医学教育の舵取りをするキャプテンである、という意識を持ってもらい、受け身ではなく、まさに、能動的にこれからの医学教育に臨んでほしいとの考えに基づいています。

7人のグループ構成を毎回変えることで多様なクラスメートから多くのことを学んでほしいと思っています。アクティブラーニングにより、学生の学習効果と意欲が高まるという学術的な報告は多数あります。アクティブラーニングを教育の基幹的概念に据えて、医療プロフェッショナリズム、英語教育、分子生物学などの科目は著しい成果を得ているとみています。



<教員体制>

欧米で使用されている英語の電子教材を中心に授業を実施しており、授業はペーパーレス化を進めています。すべての授業について学生は理解度や授業に対する具体的な意見等をオンラインのアンケート調査表を使って、授業担当者に日々伝えており、その内容は教員にフィードバックされ、教員はより質の高い教育に向けた取り組みをしています。

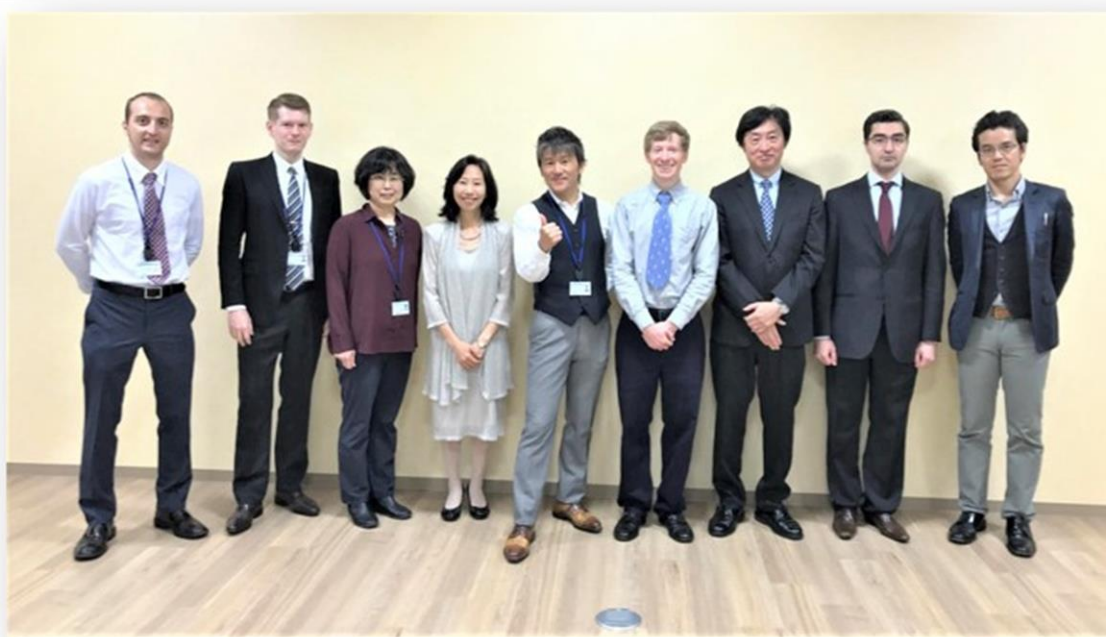
教員のFD（ファカルティーデベロップメント＝授業改善のための教員研修）は、開学の直後から毎週水曜日に英語で実施しています。

1学期は医療に必要な物理学、生物、化学などを教える授業を行い、2学期からは、基礎医学の授業がありました。総論にとどめ、3学期から始まる器官別統合講義の中で、基礎医学の各論と併せて臨床医学を教育していきます。「基礎と臨床」の一体的な教育の必要性は理解しつつも、他大学での導入は容易ではないようですが、本学では実践していきます。



<語学力>

海外で1年以上にわたる診療や教育の経験をもつ豊富な日本人教員ならびに外国人教員を多数確保し、大多数の科目で英語による授業を実施しています。入学時のオリエンテーションでTOEFL-ITPを実施し、その結果をもとに能力別の4クラスを構成して、1学期は毎日、英語の授業を行いました。必修科目「英語Ⅰ・Ⅱ」は午前を中心に全員が受講し、7限目の自由科目「英語コミュニケーションA・B」は、英語能力が十分な学生をのぞく学生が受講しています。



1学期は週に8～12コマの授業をこなし、まさに英語漬けのような毎日でした。英語の楽しさを知ってもらうため、4月のオリエンテーションでは、「英語オンリーセッション」を設け、日本語を禁止した環境のなかで、「何月何日生まれですか？」と聞いて回り、誕生日順に140人に1列に並んでもらうゲームや、「マシュマロ・チャレンジ」（パスタを使って高いタワーを立てるゲーム。一番上にマシュマロを乗せるので、この名前が付いている）といったチームワークゲームを行ったりしました。

チームで英語を使って一つのことをやり遂げることで、文法より聞いたり話したりすることを優先して馴染んでももらいました。

実際の英語の授業でも特にテキストはなく、時事・国際問題や文化・社会問題、科学・医学トピックスなどのテーマで、一般教養も英語で学びながら、特に聞く、話すといった実践的な英語力向上をめざしています。

たとえば、日本びいきのイギリス人医師と日本人の英語教員のペアの授業では文化、社会のテーマ、元英字新聞の編集長の教員とアメリカ人英語教員のペアの授業では、時事問題、国際問題をテーマに、最新のニュース等の教材を使いながら英語の授業が行われています。

この結果、日本人学生の英語力は順調に向上しています。

入学時と1学期終了時に行った試験結果を比べると、4カ月でCEFR（ヨーロッパ共通参照枠）の英語レベルの初級にあたるAレベルの学生が大幅に減ったのに対し、中上級であるB2レベルの学生が4割近くまで増加しました。

これまで英語で話す、という習慣が全くなかった多くの学生達が、日英のバイリンガルな環境を当たり前と受け止めるようになったことは、大きな成果と考えます。

2学期から医学の専門科目はすべて英語による授業となっていますが、臨床実習や共用試験、医師国家試験の準備のために3年生からは日本語が中心になります。



<最新の充実した施設・設備>



WB棟（2017年2月竣工、1期棟）に続いて2017年12月に11階建て2期棟が竣工し、日本の医科大学として最大規模（約5,200㎡）の医療教育のためのシミュレーションセンターが完成しました。センターには、模擬診察室(22室)、診察モニター室、BLS室(3室)、ERシミュレーション室、ガウンテック室(サージカルスキル演習室)、オペレーション室、ICUシミュレーション室、模擬病室(2室)等を備え、各種シミュレータを整備し、診療に必要な知識やスキルを、実践を通して学んでもらいます。



すでに始まっている患者さんとの医療面接・身体診察の授業では、22室の模擬診察室を活用し、天井に備え付けられたモニターで観察・録画・録音され、離れたモニター室から教員のアドバイスを受けたり、あとから自分の技術を確認したりすることができます。



<20人の留学生>

本学医学部の大きな特長のひとつは1学年に20人の留学生が在籍していることです。

1グループに1人ずつ留学生が入るよう、多くのグループ学修で7人ずつ20グループに分け、留学生が孤立することなく、入学直後から日本人学生の中に自然に溶け込んでいます。ほとんどの留学生は学生寮の成田インターナショナルハウスと呼んでいる寮で、ほぼ同数の日本人と共同生活を送っています。

ときには、教員とともに成田山新勝寺や都内の浅草寺などへ遠足にいたり、教員を囲んでの食事会、国際交流パーティーなどにも参加しています。

学業成績では母国でトップクラスの成績を修めていた留学生もおり、本学で優秀な成績を修める留学生も多くいます。

留学生は医学部入学の数カ月前に来日し、別科で日本語を勉強してから医学部に入学した学生が多く、来日時にはJCAT（日本語能力試験）で初級のレベル4でしたが、7月末の1学期終了時点ではレベル2程度まで向上し、2学期になってからは、グループディスカッションもレポート作成も日本語で参加できるようになっている学生がいます。

ベトナム、モンゴル、ミャンマー、カンボジア、インドネシアなど政府や国を代表する医科大学から推薦され、本学の入試を突破して入学した留学生特別奨学生は、いずれは母国の医療、医学の発展に貢献できるリーダーになることを期待しています。



<キャンパスライフ>

学生は学修の合間にさまざまな課外活動も楽しんでいます。

5月には成田キャンパスの6学科（医学科、看護学科、理学療法学科、作業療法学科、言語聴覚学科、医学検査学科）対抗の運動会が開かれ、障害物競走や馬跳び、応援合戦などが繰り広げられ、医学科が総合優勝を収めました。



後片付けも自分達で

同じく5月には「1カ月お疲れ様Party」を実施、医学部棟2階のラウンジを装飾して、DJの音楽とともに、ピザや寿司を片手に、学生同士や教員と親睦を深めました。ビンゴ大会や当日、誕生日だった学生のサプライズバースデーもあり、和やかなひとときを過ごしました。

8月には、学生と教職員の共同作業による医学部初のオープンキャンパスを開催しました。学生24人による実行委員会が中心となって、「学生プレゼン」や「学生カフェ」などを企画したほか、学生が編集した情報誌やPR動画などを制作、訪れた受験生や保護者にとっても好評でした。



<北村聖・医学部長のメッセージ>

医学部は予想以上に順調に滑り出したと自負しています。本学医学部の特長は、革新的なカリキュラムや各分野のエキスパートの先生方、最新の設備などが挙げられますが、一番の特長は学生の質です。

入試で一人あたり1時間の面接を実施し、人間性豊かでコミュニケーション能力とモチベーションの高い学生を採用したこともあり、多くの学生は何事に対しても前向きで、他人に対して心を開いた積極性をもっています。20人の留学生に限らず、背景も年齢も違う多様な学生が入学しており、入学式直後からお互いをファーストネームで呼び合い、交友関係を築き、その結果、140名全員が連携し、また相互援助をしていることは特筆すべきことと考えます。社会人経験を持つ1期生も在籍しておりますが、成績も優秀でいろいろな経験を活かして、学生のなかにすっかり溶け込んでいます。

本学は学納金を6年間合計で1850万円と私立大学で最も低額に設定しました。これは、医師として多くの人々を助けたいとの将来像を描きながら、経済的な事情によって断念する受験生に夢をかなえてほしいとの考えからです。この広く門戸を開けたことから、一般家庭からも多くの学生が入学してきました。

これまでの医科大学とは異なる革新的なカリキュラムの医学部に入学したこと、社会から注目されているということを知り、学生たちは自覚していて、自分たち1期生が頑張らなければ、ということを知り、教職員が思っている以上に学生らが意識しており、感激しています。新設の医学部に飛び込んできた学生諸君は、「伝統のないところに新しい伝統を作る」「真っ白なキャンパスに理想の医学部の絵を描いていく」という気概に溢れ、着実に新しい医学教育の歴史の一步をともに歩んでくれています。

医療、医学を学ぶことは楽しくエキサイティングだという気持ちを学生に持って欲しいという思いで、教員は授業をしています。学生にとって医師国家試験合格はゴールではなく、通過点の一つにすぎず、医師としての勉強は生涯続くのだから、それを苦痛だと思つては、患者のための医師にはなれない、どんなに忙しくても好きになれば勉強できるので、医学を学ぶことを好きになってほしいと伝えています。

将来は「さすがは国際医療福祉大学の卒業生だ」といわれるような活躍を期待しています。オールラウンダーとして、国内外のどんな環境でも、どんな地域でも総合的な診療能力を併せ持つ様々な診療科の医師、あるいは医学研究者としての力を発揮できる人になって欲しいと願っています。



北村聖・医学部長（前列中央）、後列左から、赤津晴子・医学教育統括センター長、吉田素文・医学科長、池田俊也・学務部長